

## ラムサール条約とは

正式名称を「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」といい、1971年にイランの地方都市ラムサールにおいて採択されたことから、この名で呼ばれています。

国内には37カ所(131,027ha)の条約湿地があり、そのうち新潟県内では佐潟、尾瀬及び瓢湖の3カ所が条約湿地となっています(2008年11月現在)。

ラムサール条約では、湿地そのものと、そこに生息・生育する動植物を保全しながら、湿地を賢明に利用することを目指しています。

この「湿地の保全・利用」という考え方を広めるため、交流・学習・普及啓発を土台として、多くの人々が湿地と関わっていくことが大切だと考えられています。

水鳥の生息地としてだけでなく、私たちの生活環境を支える重要な生態系として、幅広く湿地の保全・再生を呼びかけています。

産業や地域の人々の生活とバランスのとれた保全を進めるために、湿地の「ワズユース(Wise Use)」を提唱しています。これは、湿地の生態系を維持しつつ、そこから得られる恵みを持続的に活用することです。

保全・再生

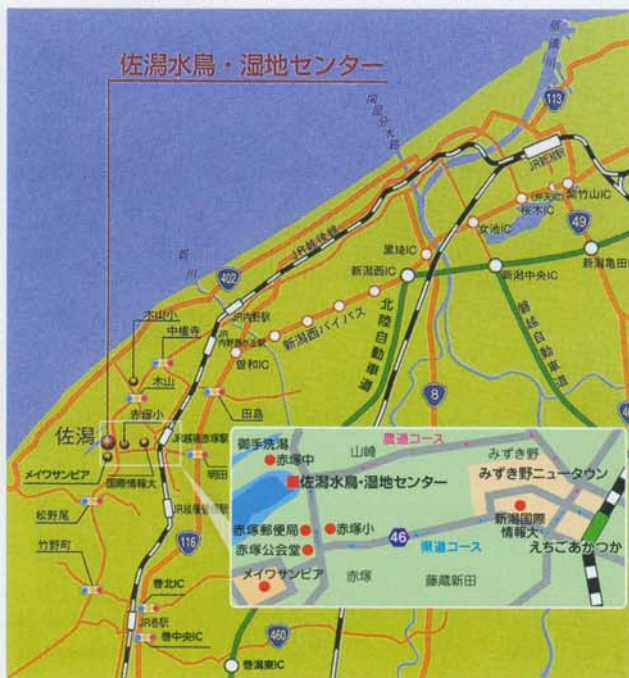
ワズユース  
(賢明な利用)

交流・学習  
(CEPA)

湿地の保全や賢明な利用のために、人々の交流や情報交換、教育、参加、啓蒙活動(CEPA:Communication, Education, Participation and Awareness)を進めることを決議しています。

## 交通案内

- 車 / 北陸自動車道新潟西ICより約30分、巻潟東ICより約30分
- JR / 【内野駅から】  
内野駅で下車後、タクシーを利用(所要時間約15分)  
【越後赤塚駅から】  
越後赤塚駅で下車後、徒歩(所要時間約40分)



## 利用ガイド

- 開館時間 / 午前9時～午後4時30分
- 休館日 / 月曜日(ただし祝日の場合は翌日)、年末年始
- 団体での御利用は事前に御連絡ください。
- 定期的な観察会として「佐潟自然散歩」「佐潟探鳥散歩」を実施しています。佐潟ボランティア解説員が佐潟の自然や生息・生育する動植物を分かりやすく解説いたします。

【佐潟自然散歩】

3～10月の第2, 4土曜日 午前9時30分から午前11時

【佐潟探鳥散歩】

11～2月の第2, 4土曜日 午前7時30分から午前9時

## 問い合わせ先

### 佐潟水鳥・湿地センター

〒950-2261 新潟市西区赤塚5404番地1

☎(025)264-3050 FAX(025)264-3051

## ラムサール条約湿地“佐潟”

# 佐潟水鳥・湿地センター ～自然とのふれあいを求めて～



ミスアオイ

コハクチョウ

## 佐潟水鳥・湿地センターへようこそ

### ■佐潟のあらまし

佐潟は、地域の水源や漁業などの生活の糧として利用されながらも、自然に近い状態が保たれてきた貴重な湖沼です。ここでは、オニバスやミズアオイをはじめとした貴重な水生植物が数多く見られます。また、冬の佐潟は、昔から白鳥の渡来地として知られ、毎年約3,000羽の白鳥が羽を休めます。さらに、国の天然記念物に指定されているヒシクイや、その姿がパンダに似て愛嬌のあるミコアイサといったさまざまな水鳥が訪れ、まさに水鳥の楽園となります。



また、佐潟ではラムサール条約の精神でもある「ワズユース」の考え方を活かしながら、今でも潟舟を使った漁業などが行われており、ハスやヒシ、魚といった潟の恵みをいただきながら、潟を守ってきた歴史が息づいています。



■刺し網漁の様子

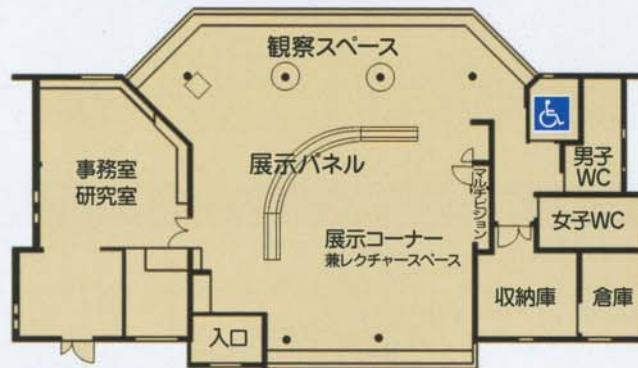
## 佐潟水鳥・湿地センターのあらまし

佐潟水鳥・湿地センターは、1996年3月に佐潟がラムサール条約湿地となったことから、水鳥類や湿地の保全についての普及啓発、調査研究及びモニタリング等を行う拠点施設として、1998年5月に開設されました(設置:環境省、管理運営:新潟市)。

### 佐潟水鳥・湿地センター全景



### 館内平面図



### 施設概要

- 構造・規模 / 木造平屋建(延床面積:324.92㎡)
- 機能別スペース / 観察スペース  
展示コーナー兼レクチャースペース
- 観察設備 / フィールドスコープ 10台  
パソコン検索装置
- 映像設備 / 高性能ビデオカメラ 2台  
65インチプラズマビジョン
- その他設備 / 太陽光発電設備(10kW)  
ベレットストーブ



### 企画事業 の開催

佐潟の自然や生きもの、文化といったさまざまな視点から各種企画事業を行っています。



### 佐潟 自然散歩 探鳥散歩

佐潟ボランティア解説員の案内による佐潟の自然解説を行っています。自然環境の解説にとどまらず、佐潟にまつわる歴史や文化をお話する機会も増えてきました。



### 拠点施設 として

当センターがワークショップなどの会場や環境教育・学習の場として活用されています。